

「生を<sup>レ</sup>変<sup>レ</sup>え<sup>レ</sup>る」<sup>1)</sup>—— RIMBAUD の詩的<sup>レ</sup>革命 (1)

南 直 樹\*

## はじめに

Jean-Nicolas Arthur RIMBAUD は、1854 年北フランスの田舎町シャルルヴィルに生まれ、1891 年アフリカの砂漠での長い彷徨生活の果て右膝にできた悪性腫瘍のためマルセイユに死んだ。

37 年の短い生涯のうち、彼の文学生活は 16 歳から 21 歳ぐらいまでの、わずか 5 年ほどのことでしかないけれども、もし彼の生をその時期にだけ限定しようとしたりすれば、当然あの不可思議な文学放棄の謎の中に踏み込まなければならなくなる。しかし彼の生の一貫性は、孤独な幼年時代から現実によって疎外され続けた人間の一つの救済（それは少しもキリスト教的である必要はないが）への渴望ということによって説明されるべきものだ。

「花」と言えば、現実の不完全な（と少なくとも RIMBAUD には思われた）花とは異なった全的な「花」を現出させることのできる「言葉」の魔術を知った RIMBAUD にとっては、有名な見者（Voyant）の詩法も、まさにこの世界を求めているが、この世界からは少しも必要とされていない人間の、それならば自分を必要とし、しかも十全な自己を展開させてくれるであろうような「もう一つ世界（un autre monde）」を創造せんがための、つまり「生を<sup>レ</sup>変<sup>レ</sup>え<sup>レ</sup>る」こと

---

\* 福岡大学人文学部教授

の言語による極限的な企てであったのである。

ただ RIMBAUD の場合、その出発の当初から他の人間たちが抱いているような現実に対する本能的な負い目といったようなものが欠けていた。Jacques RIVIÈRE が「RIMBAUD とは原罪を負わされていない存在だ<sup>2)</sup>」と言ったのはその意味であった。つまり悪は RIMBAUD ではなく、彼を受け入れない現実のほうであって、そこではあらゆる生が罪に<sup>まみ</sup>塗れて腐敗しきっているように彼には見えた。そこから彼の現実や他者にはまるっきり尊敬の念を欠いた「反抗 (révolte)」という基本的姿勢が出てくるし、その「反抗」は対象との関わり合いを欠いているため、一種絶対的なものであった。RIMBAUD は «Une Saison en enfer» の *Mauvaia sang* の章の中に次のように書いている。

Je n'ai point fait le mal. Les jours vont m'être légères, le repentir me sera épargné.[98]

(「僕はなにも悪いことをしたことがなかった。一日一日が僕には軽々としており、後悔なんかしないですむだろう。」)

«Vers nouveaux et chansons (新しい韻文詩)» を頂点として、«Une Saison en enfer» そして «Les Illuminations» を経て、遂には文学との決別に至る RIMBAUD の変遷は、この自己の無謬性に対する信念の挫折の繰り返しであり、普遍的であると信じた自己の詩的創造物という「もう一つの世界が」、所詮この強靱で頑固な現実とは交換することはできないという悲しいが、当然のどうしようもない気付きでもあった。そして文学を放棄して以後の RIMBAUD は、この悲しい発見の一つの答えとして、「風の<sup>あしうら</sup>跡をもつ男」(VERLAINE) となってヨーロッパ、バダビア、キプロスそしてアフリカなどを彷徨することによって果たしていくことになったのである。

しかし、RIMBAUD を取り巻く批評・研究は文字通り汗牛充棟であり、多彩

を極める。そうした批評の中にはかえって RIMBAUD を遠く不透明なものにしているものもある。「RIMBAUD の天才はあらゆる注釈、あらゆる証明を我々に免せるところにある」<sup>3)</sup>とは J-P. RICHARD の言葉である。RIMBAUD は「恐ろしく意識的な生活者」<sup>4)</sup>(小林秀雄)であって、彼が関心をもった唯一のものは彼自身だけであった。そして彼の全作品は RIMBAUD が自らとそれに関与したものについて語ったものに他ならない。つまり RIMBAUD は一種の自伝作家であり、作品において過去と現在(そして予言的未来)を一つの情景に二重映しにして、自己の心象の身の上を描き出したのである。それ故、RIMBAUD の詩の理解における彼の実生活上の出来事の果たす役割は限りなく大きく、それも極めて日常的な些末な事実が必要なのであるが——例えば RIMBAUD のパリ・コミューヌの参加の是非の問題や「Une Saison en enfer」の成立過程の正確な日時等——、失われてしまったそれは回復の余地はないわけで、結局作品の読解によって理解できることから推論を組み立てていくしかない。この小論はまさに卓れた RIMBAUD 論を書いた Yves BONNEFOY のそれに倣って、「RIMBAUD par lui-même (彼自身によるランボー)」であると言ってもよいが、BONNEFOY はその本の劈頭でこう述べる。

RIMBAUD を理解するために、RIMBAUD を読もうではないか、混じりこんできたかくも多くの他の声から彼の声を取り出そうと望もうではないか。RIMBAUD 自身がわれわれに語っていることを遠くへ、他所へ探しにゆくのは無益なことである<sup>5)</sup>。

だがここで、ただ一つ気を付けなければならないことがある。それは Suzanne BERNARD が指摘した次のような言葉である。

彼(RIMBAUD)は、彼が現実にあるようにではなく、彼がやりたいと願い、

なりたいと望んだ如くに自らを描く<sup>6)</sup>。

ここに RIMBAUD という人間の疎外を忌避し、未来へ投企し、本源的自己を取り戻そうとする詩人としての姿を介間見ることができるだろう。

## I

RIMBAUD の作品の中で最も古いものは、彼がシャルルヴィルの中学校に上がる前、まだロッサ学院の通学生であった頃に手帖に書きつけられたという無題の *Le soleil est encore chaud...* で始まる散文であるが、後に〈J'ai pour moi ma sainte poésie et ma pudeur!...[195] (「僕にはわが聖なる詩と恥じらいの感情があるのだ! ...」)〉(*Un cœur sous une soutane*) と吐くであろう RIMBAUD が、後期の作品、特に「Les Illuminations」の諸詩編で特に徹底させることになる、読まれることを全く意識せず自分のためにだけ書くという態度をこの散文の中でも守りながら、10 歳にも満たない少年の夢が精一杯の技法を駆使しながら繰り広げられているのが見られる。

この散文は、キリスト教道徳や日常的規範を厳格に守り、子供たちにもそれを厳守するよう命じる母親の厳格に過ぎる躰けの下で、極めて品行方正な優等生であった少年 RIMBAUD のある意味では生涯変わる事のなかった奇妙に苛立った心理を際ださせている。この短文の途中で「私の父は親衛隊の士官だった。(中略)彼は短気で激しやすい性格で、よく怒るたちで、気に入らぬことは少しも我慢しようとしなかった。私の母はまったく違っていた。優しく穏やかな女で、ほんのちょっとしたことにも怖がりで、でも一方家は申し分なく整理が行きとどいていた。母はとても物静かだったので、父は若いお嬢さんにするみたいに、母を面白がらせようとした。」[173]と父親と母親の肖像を描いているが、特に少年 RIMBAUD の心に絶対的に大きな重たい存在として押し掛

かっていた母親 Vitalie を、「とてももの静かな」女性として描くという行為によって、母親と自分の関係を見極め、新しい母親像を創出しようとする切実な少年の心が働いていたことは見易い道理である。それは対象を言葉によって捉え、現実を変換しうることの発見でもあった。恐らく、陣営を転々としてただ種付けだけにしか妻の家を訪れなかった彼の父親 Frédéric 大尉、1860 年の末娘の Isabelle の誕生の後、既に家に寄り付かなくなっていた父親については、ただ両親の諍いの時の銀の食器の床に落ちて弾ける音以外、記憶といった記憶も存在していなかった RIMBAUD には、その記憶がほとんどないが故に、かえって母親の厳格で隠微な性格とは裏返しの健全な憧れの対象として描かれていることは想像に難くない。実際実生活での父親の影響は皆無と言ってよいが、ただ RIMBAUD はその生涯の結末から見れば、遺伝的に父親から恐らく放浪癖とものを書く能力（父親は立派なアルジェリアの地理報告書を提出したりしている）とを受け継いだことは確かである。前者は遂には RIMBAUD を夭折へと導く砂漠の彷徨の素因となったとすることができようし、後者はそれがもし正しければ驚異の詩人 RIMBAUD を産み出すという偉大な貢献をしたのかもしれない。しかしながら、今日では RIMBAUD の性格の由来を父親ではなく、母側の CUIF 家の血統と母親の厳格に過ぎる教育にその因を求めるのが一般的である。彼女の兄弟は、一人は「アフリカ人」と綽名され、犯罪を犯してアフリカに遁走し、もう一人は酒と放蕩に身を持ち崩した浮浪人であったという。彼女はそうした兄弟たちを忌み嫌って終生口にしなかったといわれる。彼女の頑ななまでの閉鎖性と頑迷さは、自分の兄弟たちの墮落した様を目の当たりにした女性の自己保身の節操から出たとみて差し支えない。「彼女が尊敬するのは世間のしきたりではなく、おのれの神経症を拒むために、おのれに課した絶対的な法則である」<sup>7)</sup> という Yves BONNEFOY の指摘は正しいだろう。

Madame se tient trop debout dans la prairie

(5)

Prochaine où neigent les fils du travail; l'ombrelle

19 Aux doigts; foulant l'ombelle; trop fière pour elle; (*Mémoire*) [87]

(「夫人はほど近い牧場にすくっと身を立て  
牧場には陽光の絲が雪と振り、指には日傘、  
繖形花を踏みしだき、あまりと言えは誇り高く。」)

自分だけにしか関心のない RIMBAUD には、一瞬も横を向く余裕さえ与えようとしない母親を、身動きの取れないそうした関係を最も耐え難いものとして嫌悪せずにはいられなかった。

Parents, vous avez fait mon malheur et vous avez fait le vôtre. (*Nuit de l'enfer*) [100]

(「両親よ、あなたがたが僕の不幸を作ったのだ、そしてあなた方自身の不幸も。」)

Mais l'orgie et la camaraderie des femmes m'étaient interdites. Pas même un compagnon. (*Mauvais sang*) [97]

(「だが、酒宴も女たちとの交際も、ほくには禁じられていた。一人の<sup>なかま</sup>朋友さえいなかった。」)

RIMBAUD は、恐らくはこのような境遇のお陰で「愛」そのものから疎外された存在として生きてこなければならなかった。特に女性に対する愛情関係については、*Mes petites amoureuses* の次のような詩句はそれをよく示している。

Ô mes petites amoureuses,

Que je vous hais!

Plaquez de fuffes douleureuses

28 Vos tétons laids! [41]

(「おおぼくの小さな恋人たち

ぼくは君たちが大嫌いさ!

みじめなぼろ布でも被せておけ

醜いきみたちのおっぱいなど!」)

それ故、彼はまず愛そのものの再発明から始めねばならなかった。

Je n'aime pas les femmes. L'amour est à réinventer, on le sait. (*Délires I*)

[103]

ぼくは女たちを愛しはしない。愛というのは創<sup>つ</sup>り直すものだ、知ってのとおりね。)]

それが RIMBAUD の見者の理論の目指す大きな一つの目標であり、それは拳銃の音とともに消え失せてしまわなければならなかったあの VERLAINE との同性愛的関係であった。RIMBAUD が VERLAINE を初めて訪れたのは、見者の詩法に覚醒した直後の 1871 年 9 月のことであったが、その後新婚早々の VERLAINE の小市民的生活を破壊しながら、パリ、ブルッセルそしてロンドンと後者を放浪生活へと引き摺り回す。恐らく、一方的に生活費の算段は VERLAINE に負わせながら、見者の詩法の実践に邁進する RIMBAUD には、それまであらゆる面で彼の世界の中心であった母親のもとを離れ、来るべき「もう一つ別の世界」を創り出すことが目標であった。VERLAINE との同性愛的関係はその来るべき「もう一つの世界」、「新しい愛の創造」でなければならなかった。しかし、新しい愛の再創造だと信じた VERLAINE との関係も、後者の RIMBAUD への同性愛と妻 Mathilde への未練の間で揺れる怯懦によつ

て、すぐにあの母親とのそれと同じように身動きの取れない悪縁以上のもの  
でなくなってしまう。RIMBAUD にとっては自己の見者の詩法の実践にもはや  
VERLAINE は邪魔な存在となり、遂には VERLAINE を見捨ててパリに行こうと  
する RIMBAUD を、恐らくは RIMBAUD との関係の破綻への絶望と RIMBAUD が  
パリに行けば Mathilde との離婚は避けられないという恐怖から、VERLAINE  
による RIMBAUD への拳銃発射という有名なブルッセル事件が起きて終わる。  
RIMBAUD にとっては、異性愛も同性愛も同じ「新しい愛の再創造」、つまりは  
新しい人間関係の創造のための等価物を意味していた。《Les Illuminations》の  
中にある *Vagabonds* という詩編は、恐らく RIMBAUD が二人の関係を直截に説  
明した唯一の作品である。

Pitoyable frère! Que d'atroces veillées je lui dus! «je ne me saisissais  
pas fervement de cette entreprise. Je m'étais joué de son infirmité. Par ma  
faute nous retournerions en exil, en esclave.» Il me supposait un guignon  
et une innocence très bizarres, et il ajoutait des raisons inquiétantes.

Je répondais en ricanant à ce satanique docteur, et finissais par gagner  
la fenêtre. Je créais, par delà la campagne traversée par des bandes de  
musique rare, les fantômes du futur luxe nocturne.

Après cette distraction vaguement hygiénique, je m'étendais sur  
paillasse, et, presque chaque nuit, aussitôt endormi, le pauvre frère se  
levait, la bouche pourrie, les yeux arrachés, —tel qu'il se rêvait!—et me  
tirait dans la salle en hurlant son songe de chagrin idiot.

J'avais en effet, en tout sincérité d'esprit, pris l'engagement de le rendre  
à son état primitif de fils du Soleil,—et nous errions, nourris du vin des  
cavernes et du biscuit de la route, moi pressé de trouver le lieu et la  
formule.[136 - 137]



(「哀れな兄貴！奴のおかげで、寝ずに過ごした悲惨な夜が幾度あったことか！「私

がその企てに熱を入れて取り組んでいないとか。私が奴の弱さを手玉に取ったとか。私の過ちのせいで、われわれは鳥流しの境遇に、奴隷状態に舞い戻りとか。」彼はこの私には、実に奇妙な運の悪さと純真さが同居していると考え、不安を掻き立てるようなあれこれの理由を付け足すのだった。

私は鼻であしらいながらこの悪魔めいた学者先生に応じていたが、最後には窓辺に行ってしまった。そして珍しい音楽の幾本もの筋が横断する田園の彼方に、未来の夜の豪華の亡霊を想像していた。

この何となく衛生的な気晴らしの後で、私は藁のマットに横になった。するとほとんど毎晩のように、寝入ったばかりの哀れな兄貴は、腐った口にくりぬかれたような目をして——夢の中でまさにそんな姿の自分を見ていたのだ——起き上がり、自分が見たばかりの、愚かしい悲嘆の夢を喚き散らしながら、私を部屋へ引っ張っていくのだった。

なにしろ私は、本当に真面目な気持ちで、太陽の息子としての原初の状態に彼を返してやることを、約束していたのだ、——それで私たちは、泉の水を飲み大道の堅パンをかじりながら彷徨い歩いていたが、私のほうは、場所と方式を見つけようと躍起になっていた。] (下線筆者)

「太陽の息子としての原初の状態に彼を返してやる」ことこそが VERLAINE との関係において、RIMBAUD が見者の詩法の実践において目指したことであったのである。この「太陽」とは、«Vers nouveaux» の絶唱 *L'Éternité* に出るそれであるだろう。

Elle est retrouvée

Quoi?—L'Éternité.

C'est la mer allée  
4 Avec le soleil,[79]  
〔あれが見つかった。  
何が——〈永遠〉さ。  
太陽と連れ立って  
行っちゃった海さ。〕

それにしても、あれほど希求した「愛の再創造」だと信じた VERLAINE との関係の破綻が RIMBAUD にとってどんなに深い絶望であったかは、「Les Illuminations」の *Ouvriers* の次の詩句がよく示していよう。

Non! Nous ne passerons pas l'été dans cet avare où nous ne serons jamais que des orphelins fiancés. Je veux que ce bras durci ne traîne plus une chère image.[133]

〔ごめんだ！私たちがいつまでたっても婚約を交わした孤児でしかないようなこんなしみたつた国で、夏を過ごすまい。私は、こわばった腕が。もう愛しい面影を引きずったりしないことを望むのだ。〕

## II

あのような頑迷な母親の圧政下で「くそ信心小僧」とまで仇名された RIMBAUD が「反抗」の心に目覚めて母親の支配から逃れようとすれば、その母親にすべてを負っているキリスト教世界からの離反が始まるのは当然のことである。

je n'ai jamais été chrétien; (*Mauvais sang*) [97]

(「私は一度だってキリスト教徒だったためしはない。」)

ここから RIMBAUD 特有の瀆神的態度が出てくるが、それは初期詩編、例えば神学生を子供らしいもじりや皮肉で描いた *Un Cœur sous soutane* や、キリスト教によって抑圧されていた欲望の昂りに怯える少女を描いてキリスト教道徳を攻撃した *Les Premières communions* (Et mon cœur et ma chair par ta chair embrassés / Fourmillant de baiser puride de Jésus!...Christ! ô Christ, éternel voleur des énergies,[65] 「私の心もあなたの<sup>からだ</sup>肉体で抱擁される私の<sup>からだ</sup>肉体もイエスの腐った<sup>くちづけ</sup>くちづけでむずむずしているわ! (...) キリストよ! おおキリスト、永久にエネルギーを盗む者よ」) などから «Proses évangéliques» や «Une Saison en enfer» まで一貫して変わらず見られるものである。特に «Une Saison en enfer» は異教徒的立場からのキリスト教との対決が一つの大きな主題になっている。しかし RIMBAUD のキリスト教に対する反抗は、母親に対するそれがそうであったと同じように徹底化されることなく、離反と拘束を繰り返す。

Il m'est bien évident que j'ai toujours été de race inférieure. (*Mauvais sang*) [94]

(「ぼくが常に劣等種族であったことは明々白々だ。」)

J'ai de mes ancêtres gaulois l'œil bleu blanc, la cervelle étroite, et la maladresse dans la lutte. (...) D'eux, j'ai : l'idolâtrie et l'amour du sacrilège;—oh! tous les vices colère, luxure,—magnifique, la luxure;—surtout mensonge et paresse. (*Ibid.*) [94]

(「ぼくは祖先のガリア人から、白く青い眼や狭苦しい脳味噌と、戦いの拙劣さを受け継いだ。 (...) そんな彼らからぼくが<sup>う</sup>承けているのは、偶像崇

拜と瀆聖の好み——ああ！一切の悪徳、怒り、淫乱——素晴らしいものだ、淫乱ってやつは——、そしてとりわけ、嘘と怠惰だ。』)

「怒り」、「淫乱」、「怠惰」などは「七つの大罪」としてキリスト教が堅く禁じた悪徳であり、キリスト教世界と対立する異教の下に生まれたことを宣した RIMBAUD は、

Je ne me vois jamais dans les conseils du Christ; ni dans les conseils des Seigneurs, —représentans du Christ. (*Ibid.*) [95]

(「キリストの教えのうちにも、また領主貴族たち——キリストの代弁たち——の教えのうちにも、断じてぼくは自分を認めることなどない。』)

Mais n'y a-t-il pas un supplice réel en ce que, depuis cette déclaration de la science, le christianisme, l'homme *se joue*, se prouve les évidences, se gonfle du plaisir de répéter des preuves, et ne vit que comme cela! Torture subtile, niaise; source de mes divagations spirituelles. (*L'impossible*) [113]

(「だが、しかし、真の責め苦は、あの科学の宣言以来、キリスト教以来、人間が自分自身をもてあそび、まったく自明なことを自らに証明しては、そんな証明を繰り返す喜びでいっぱいになること、もっぱらそんな風にか生きていないということのうちにこそ、あるのではないか！巧妙で、馬鹿げた拷問だ。僕の精神的な戯言の源だ』)

とキリスト教を攻撃しながらも、異教の血に耐え切れず再びキリスト教に救いを求める姿を見せることもある。

Le sang païen revient! L'Esprit est proche, pourquoi Christ ne m'aide-t-il pas, en donnant à mon âme la noblesse et la liberté. Hélas! L'Évangile a passé! L'Évangile. (Mauvais sang) [95]

(「異教徒の血が回帰して来る！〈<sup>エスプリ</sup>精霊〉は近くにいる、なぜキリストは僕を助けてくれないのか、高貴さと自由を僕の魂に授けて。ああ！〈福音〉は去ってしまった！福音よ！福音。」)

Si Dieu m'accordait le calme céleste, aérien, la prière, — comme les anciens saints. (*Ibid.*) [99]

(「神がぼくに天上の、空気のような静穏を、祈りを授けてくれたらいいが、——昔の聖人たちのように。」)

C'est vrai; c'est à l'Éden que je songeais! Qu'est-ce que c'est pour mon rêve, cette pureté des races antiques! (*L'impossible*) [113]

(「ぼくが思い浮かべていたのは、エデンの園だった！ぼくの夢にとっていったいなんだというのか、古代の種族たちのあの純粹さが！」)

RIMBAUD は「エデンの園」の神話から抜け出すことができていない。しかし、RIMBAUD にはもはやキリスト教によって救われることができない自分という存在であることは自明のことなのだ。

J'attendais DIEU avec gourmandise. Je suis de race inférieur de toute éternité. (*Mauvais sang*) [95]

(「ぼくはがつがつと貪婪に神を待っている。永久にぼくは劣等種族の出なのだ。」)

恐らくキリスト教は、或る時は RIMBAUD を遥かな彼岸に導いてくれるものとして、また或る時は彼の自由を抑圧するものとしてあったのである。しかしながら、少なくとも RIMBAUD にとっては、キリスト教は無神論者や宗教無関心派などよりもより切実な問題としてあったであろうことは間違いない。

キリスト教への反抗は、「Une saison en enfer」におけるような自らをキリストと対決させようとする宗教的世界観の問題に発展する前に、もっと日常的な生活面での嫌悪から出てきていることは前にも少し述べたが、*Les Poètes de sept ans* という詩はその最も忠実な証拠である。

Et ma Mère, fermant le livre du devoir,  
S'en allait satisfaite et très fière, sans voir,  
Dans les yeux bleus et sous le front plein d'éminences,  
L'âme de son enfant livrée aux répugnances.

5 Tout le jour il suait d'obéissance; très  
Intelligent; pourtant des tics noirs, quelques traits,  
Semblaient prouver en lui d'âcres hypocrisies.

. . . . .

L'été

Surtout, vaincu, stupide, il était entêté

15 A se renfermer dans la fraîcheur des latrines :

Il pensait là, tranquille et livrant ses narines.

. . . . .

Pitié! ces enfants seuls étaient ses familiers

Qui, chétifs, fronts nus, œil déteignant sur la joue,

Cachant de maigres doigts jaunes et noirs de boue

25 Sous des habits puant la foire et tout vieillots,  
Conservaient avec la douceur des idiots!  
Et si, l'ayant surpris à des pitiés immondes,  
La mère s'effrayait; les tendresses, profondes,  
De l'enfant se jetaient sur cet étonnement  
30 C'était bon. Elle avait le bleu regard,—qui ment!

. . . . .

Il craignait les blafards dimanches de décembre.  
45 Où, pommadé, sur un guéridon d'acajou,  
Il lisait une Bible à la tranche vert-chou;  
Des rêves l'oppressaient chaque nuit dans l'alcôve.  
Il n'aimait pas Dieu; mais les hommes, qu'au soir fauve,  
Noirs, en blouse, il voyait rentrer dans le faubourg  
50 Où les crieures, en trois roulements de tambour,  
Font autour des édits rire et gronder les foules.  
—Il rêvait le prairie amoureuse, où des houles  
Lumineuses, parfums saints, pubescences d'or,  
Font leur remuement calme et prennent leur essor!

35 Et comme il savourrait surtout les sombres,  
Quand, dans la chambre nue aux persiennes closes,  
Haute et bleue, âcrement prise d'humanité.  
Il lisait son roman sans césse médité.  
Plein de lourds ciels ocreux et de fotêts noyées,  
60 De fleurs de chair aux bois sidéraux déployées.  
Vertige, écroulements, déroutes et pitié!

—Tandis que se faisait la rumeur du quartier,  
En bas, —seul, et couché sur des pièces de toile  
Écrues, et pressement violemment la voile![43-45]

(「そこで〈母親〉は、宿題帳を閉じて。

満足してとても誇らしく立ち去った。

青い眼の奥、秀でたお額でこの下に、

わが子こころの魂がうんざりしきっているとも知らないで。

一日中子供はひたすら言いつけに従った。とても  
頭がいい。けれども暗いチック症状、一寸した表情は、  
その子の中の苦い偽善を証すかのようだ。

( . . . . . )

夏にはとりわけ、参ってしまい、馬鹿みたいで、頑なに  
涼しい便所の中に閉じこもる。

そこで、安らかに鼻孔を開いて、思いにふけた。

( . . . . . )

かわいそうに！親しい友とてあの子らばかり  
みんな、いじけて、帽子も被らず、頬っぺの上の瞳も空ろ、  
泥で重くなった黄色いやせた指を

下痢の臭うくたびれ果てた目の下にひそめて、

馬鹿みたいにゆっくりと喋っていた！

子供が不潔な連中と仲良くしている現場を見つけると、

母親は大恐慌だった。子供の深い優しさは

この驚き様に逃さず飛びかかった。

よかった。母親は青い眼をしていた、——嘘つきなのさ。

( . . . . . )



十二月の陰気な日曜は苦手だった、  
ポマードをつけて、マホガニーのテーブルで、  
キャベツ色の背表紙の聖書を読む日々だ。  
夜毎にいろんな夢にうなされてた。  
神様は好きでなかったが、鹿子色の黄昏に、  
ブルゾン姿で、家路を辿る、町の男たちは好きだった。  
町では大声の広報係が太鼓を三度とどろかせ、  
布告に集う群衆を笑わせどよめかせていた。  
——子供は夢見た、恋の草原、そこには  
光に輝くうねり、健康な匂い、黄金の柔毛にこけが、  
穏やかに揺れ動きやがて飛び立つ！

それにとりわけ暗いところが好ましかった。  
高くて青い、湿気のひどい、  
家具一つない部屋の鎧戸を締めきって、  
黄土色の重い空や洪水の森、  
星の林に咲き誇る肉の花で満ちた  
いつも心を去らぬ我が小説を読みふける時、  
目眩き、崩壊、潰走や憐み！  
——下では、巷のざわめきが聞こえていたが  
——ひとり、生麻の布に寝そべって  
帆船の帆に激しい思いを寄せていた！」

この詩の最後は *Le Bateau ivre* への道はすぐであることを示しているが、詩全体はおよそ怪物的に成長する前の少年 RIMBAUD の母親の圧政の下、孤独な生活振りが、自分の過去への感傷を織り交ぜながら見事に語られている。それ

は、後に «Une saison en enfer» の中で、

Ah! cette vie de mon enfance, la grande route par tous les temps, sobre surnaturellement, plus désintéressé que le meilleur des mendiants, fier de n'avoir ni pays, ni amis, quelle sottise c'était.—Et je m'en aperçois seulement! (*L'impossible*) [112]

(「ああ！ぼくの少年時代のあの生活、どんな天気であれおかまいなく街道を歩み、自然に反するほど飲み食いを慎み、乞食たちのうちでもいちばん善い人よりももっと無私無欲で、国も持たず、友もないことを誇りにしていたが、なんとも愚かだったことか。

——しかも、ようやくそれに気がつくだけなんだ！)」

と激しい悔恨をもって想いだされる生活なのである。

母親に代表される彼を抑圧しようとするものへの反抗は、キリスト教に対すると同様あらゆる面に拡大され、社会体制そのものから彼の生活環境で出くわす具体的なものまで RIMBAUD は嘲笑と憎悪を投げつけられずにはすまない。絶対主義 (*Le Forgeron*) や第二帝政とその権化である Napoléon III (*L'Éclatan Victoire de Sarrebruck*) (*Rages de Césars*) (*Morts de quatre-vingt-douze*) への批判と嘲弄、更には、広場に軍楽を聞きに集まる鼻眼鏡をかけデブデブと太ったシャルルヴィルのブルジョワたち (*À la musique*)、物臭で、威張りくさった図書館員 (*Les Assis*)、教会に勝手な願いを持ち込み群がる貧者たち (*Les Pauvres à l'église*)、彼の気儘な散策を邪魔する税関吏 (*Les Douaniers*) などが «Premiers vers (初期詩編)» での RIMBAUD のやり場のない罵倒の対象となっているが、ここではその端的な詩編 *Qu'est-ce que pour nous, mon Cœur...* を読んでみよう。そこには RIMBAUD の破壊精神がいかに激越なものであったかを読みとれる。

Qu'est-ce pour nous, mon Cœur, que les nappes de sang  
Et de braise, et mille meurtres, et les longs cris  
De rage, sanglots de tout enfer renversant  
4 Tout ordre; et Aquilon encor sur les cébris;

Et tout vengeances? Rien!...—Mais si, toute encor,  
Nous la voulons! Industriels, princes, sénats :  
Périssent! puissance, justice, histoire; à bas!  
8 Ça nous est dû. Le sang! le sang! La flammé'or!

Tout à la guerre, à la vengeance, à la terreur,  
Mon esprit! Tournons dans la morsure : Ah! Passez,  
Républiques de ce monde! Des empéreur,  
12 Des régiments, des colons, des peuples, assez!

Qui remuerait les tourbillons de feu furieux,  
Que nous et ceux que nous nous imagions frères?  
A nous, romanesques amis : ça va nous plaire.  
16 Jamais nous ne travaillerons, ô flots de feux!

Europe, Asie, Amérique, disparaissez,  
Notre marche vengeresse a tout occupé,  
Cités et campagnes!—Nous serons écrasés!  
20 Les volcans sauteront! Et l'Océan frappé...

Oh! mes amis!—Mon cœur, c'est sûr, ils sont des frères;

Noirs inconnus, si nous allions! Allons! allons!  
Ô malheur! Je me sens frémir, la vieille terre,  
24 Sur moi de plus en plus à vous! La terre fond,

25 Ce n'est rien! j'y suis toujours.[71]

(「おれの心よ、血と燠の、真赤な水脈と大虐殺、  
長く尾を曳く憤怒の叫喚、秩序を一切くつがえす  
地獄の底のすすり泣き、それが一体なんだって?  
廃墟の上には今日もお北風が寒く服ばかり。

復讐だって? 下らない! .....——とは言うものの  
復讐は、おいらの望みとするところ! 企業家、殿様、元老院、  
滅びてしまえ! 権力も、正義も、歴史もあるものか!  
それがもとより当然だ。血だ、血を流せ、金の炎だ!

戦争、復讐、恐怖へとぞっこんこの身を打ち込んで、  
おれの精神よ、<sup>きず</sup>咬傷のためのたうちまわれ、行っちまえ、  
ああ、世界中の共和国! 皇帝陛下よ、  
連隊よ、阿呆大佐よ、民衆よ、もう沢山だ!

おいらとおいらが兄弟と思う人々をさし措いて、  
怒り狂った火の渦をあおる奴とて誰がいる?  
さあ来てくれ、風変りな友人たち、待ってるぞ。  
おお火の波よ、金輪際、おいらてこでも働かねいぞ!

ヨーロッパ、アジア、アフリカ消え失せろ。

恨みに燃えた進軍は一切合切占領だ、  
都会も田舎もあるものか！おいらのこの身は砕け果て！  
火山は飛び上がり！海は狂い……

おおわが友よ！——おれの心よ、たしかに彼らの兄弟だ。  
未だ見も知らぬ黒人よ、一緒に行けたら！さあ！さあ！  
おお痛ましや！おれは知る、古いぼれた大地の震きは、  
次第次第に高まって！大地は遂に崩れ出す。

何でもないうや、おれはいる、相も変わらずおれはいる。』)

こうした反抗は、単に日常的、政治的次元に止まることなく、人間のあらゆる意味での規範である「理性」に対しても RIMBAUD の攻撃の手が向けられることは注目しなければならない。

Je ne suis pas prisonnier de ma raison. (*Mauvais sang*) [[99]

(「ぼくは自分の理性のとりこではない。』)

後期になると、RIMBAUD の反抗は内から溢れ出るかのように苛烈なものとなって現れ、反抗することに反抗するといった一種絶対的なものへと発展する。

Non! non! à présent je me révolte contre la mort! Le travail paraît trop léger à mon orgueil : ma trahison au monde serait un supplice trop court. Au dernier moment, j'attaquerais à droite, à gauche... (*L'éclair*) [[114-115]

(「いや！いや！今、ぼくは死に反抗しているんだ！労働は、ぼくの傲りにとっては、あまりに軽すぎるようだ。この世への反逆ということも、短すぎる刑苦だろう。最後の時がくれば、右にも左にも攻めかかってやるが……」)

しかし、RIMBAUD の反抗は LAUTRÉAMONT のそのような宇宙的な響きを持つことはない。それは彼の反抗が常に最も現実的なものから直接的に発していたからである。

### III

こうした一種当たると幸いに投げ散らす罵倒や嘲笑の反抗的態度は、RIMBAUD の一つの重要な特徴を明らかにする。

RIMBAUD の事物に対する接近の方法は、その対象の甘ったるい感傷的な美しさをかなぐり捨てて、事物の単一性を崩壊させ奇形化することによって、醜悪さをその表面に浮かび上がらせようとするものである。美の中に潜む奇怪さを最初に発見したのは、「美は常に奇妙なものである」<sup>8)</sup>と言った BAUDELAIRE であったが、RIMBAUD の醜悪なものに対する偏執は、詩全体に持続的な緊迫感を与えるのに役立っているし、醜悪なものが美的なものと対照されて用いられているため、一層際立ったものとして映る。

そうした例は、《Premiers vers》に属する RIMBAUD がシャルルヴィルの図書館員の物臭な態度に腹を立てて書いたと言われる *Les assis* に既に見られるもので、RIMBAUD はそこで当の相手を攻撃して自己主張を行おうとしているのではなく、

Noirs et loupes, grêlés, les yeux cerclés de bagues

Vertes, leurs doigts boulus crispés à leurs fémurs  
Le sinciput plaque de hargonocités vague  
4 Comme les floraisons lépreuses des vieux murs;[36]  
(「おできに黒ずみ、あばた面、眼には緑の隈をめぐらし、  
瘤だらけの指を腿のあたりでひくひくさせて、  
前頭部には訳の分からぬ邪険をはりつけ、  
まるで古壁に出た癩病のはなかざりだ。」)

と部分部分が繋がって、

Ils ont greffé dans des amours épileptiques  
Leur fantasque ossature aux grands squelettes noirs  
De leurs chaises; leurs pieds aux barreaux ravhiriques  
8 S'entrelacent pour les mains et pour les soirs!

Ces vieillards ont toujours fait tresse avec leurs sièges,[37]  
(「あいつらは癩癩じみた愛の発作で  
異様な自分の骨格をわが椅子の大きく黒い骸骨に接木した。  
その足は<sup>く</sup>る<sup>る</sup>佝僂病やみの椅子の棧のところで、  
朝と夕となく絡み合っている！

あのお爺んたちは年がら年中椅子とつながっていて、」)

と醜い老人が立ち現われてくる様が描き出される。それは前にも引いた *A la musique* 中の「時計にぶら下がっている公証人」と同じように、通常の形態が分解されて新たな視点の下新しい醜悪さの世界へと組み替えられているので

ある。

この醜悪なものに対する偏執は、母親と衝突する度に花開いたという「糞尿譚 (scatologie)」へと展開されてゆく。

Elle passa sa nuit sainte dans des latrines.[64]

(*Les premières communions*)

(「彼女はその神聖な夜を便所で過ごした。」)

便所が抑圧に耐えるための唯一の避難所であることは、*Les Poètes de sept ans* でも見られたが、詩全体が糞尿譚で構成された詩は、*Vénus abdyomène* である。

Comme d'un cercueil vert en fer blanc, une tête  
De femme à cheveux bruns fortement pommadé  
D'une vieille baignoire émerge, lente et bête,  
4 Avec des déficits assez mal ravaudés;

Puis le col gras et gris, les larges omoplates  
Qui saillent; le dos court qui rentre et qui ressort;  
Puis les rondeurs des reins semblent prendre l'essor;  
8 La graisses sous la peau paraît en feuilles plates;

L'échine est un peu rouge, et le tout sent un goût  
Horrible étrangement; on remarque surtout  
11 Des singularités qu'il faut voir à la loupe...



Les reins portent deux mots gravés : Clara Venus;  
—Et tout ce corps remue et tend sa large croupe  
14 Belle hideusement d'un uccère à l'anus.[22]

(「ブリキ製の緑色の棺からでも出るように、  
油で固めた褐色髪の女の頭ひとつ  
ゆっくりと間抜け面して、古びた浴槽から立ち現われる、  
整形がねっからまずく欠点だらけだ。

やがて脂ぎったうす黒い首、広い  
突き出たいかり肩、凸凹している短い背中、  
続いて見える腰の丸みはいまにも弾みださんばかり  
皮下の脂肪はべったりと木の葉でもしきつめたよう。

背筋は少々赤みをおびている、それが全体が  
いうにいわれぬ嫌味な感じだ。とりわけ目に立つ  
可笑<sup>おか</sup>しなところは、拡大鏡でとっくり調べねばなるまい……

腰には二言刺青がしてある、「輝くヴィーナス」と。  
——それから全身で大きなヒップをくねらせ突きだす  
おできをでかして怖<sup>おそけ</sup>気をふるうみごとさだ。)]

この詩は古代の統一的な美を唯一の目標とした高踏派に対するパロディだともいわれているが、RIMBAUD にあっては BOTTICELLI の絵画に見られるような、精神的にも視覚的にも最も美しいヴィーナス誕生の情景が徹底的に畸形化されていて、いわば醜悪なる美を創り出そうと試みられていると言うことができ

る。更に、便器にしゃがみこんだ僧侶を描いた *Acroupissements* などに見られる RIMBAUD の 醜悪なものに対する偏愛は、あの「見者の手紙 (◀*Lettres du voyant*▶) の「問題は怪物的な魂を作りあげることです。(中略) 顔面に疣いぼを植えておいて、育てている人間をご想像ください」[251] という言葉の一つの実践であった。それは醜悪化の方法によって常識に捉えられた現実を創り変えようとする RIMBAUD の 錯乱という見者の一方法であったであろうということでもある。こうした伝統的な美に対する攻撃は、キリスト教同様西欧的なものに対する RIMBAUD の 拒絶の態度の一つあったと考えられる。

#### IV

こうした反抗心の故、RIMBAUD は高慢な精神を振り撒きながらあらゆる既存のものに全身全霊でもって激突していったけれども、と同時にそこには過酷な現実によって絶えず痛めつけられ、意気消沈した RIMBAUD の姿が認められる。先に見た *Les Poètes de sept ans* に流れるあの淡い悲しさは、帰ってくることのない母親を待つ孤児たち (*Les Etrennes des orphelins*)、パン屋の親父が作るパンをうっとりと夢見心地で見つめる貧しい子供たち (*Les Effarés*)、普仏戦争の犠牲となって谷間に一人眠る若い兵士 (*Le Dormeur du val*) といった小さな者、弱い者たちに対しても同じように注がれている。それは信心深い貧しい家庭に育ち、◀*Dans un grenier où je fus enfemé à douze ans j'ai connu le monde, j'ai illustré la comédie humaine.*▶ [129] (「12歳の時閉じ込められた屋根裏部屋で、ぼくは世の中を知り、人間喜劇を解き明かした」) (*Vies III*) と語る RIMBAUD がそこに自己の孤独な姿を投影させて、感情移入させているのかもしれない。◀*Poésies*▶ にみられる技法よりも感情の露わな様は、それだけ彼の悲しみは直截であったことを示しているのであろうが、RIMBAUD のこの孤独感や悲しみは意外と深く、RIMBAUD の不幸を云々するならば、この孤

独を孤独として、悲しみを悲しみとして甘受しきれないところにあったと言えるかもしれない。恐らく RIMBAUD の精神は悲しみなり喜びなりの感情の一定の次元に留まるにはあまりに激し過ぎたし、

Ma vie serait toujours trop immense pour être dévouée à la force et à la beauté.[111] (*Délires II*)

(「ぼくの生は、力と美に捧げられるというには、いつだってあまりに大き過ぎるのだろう。」)

そうした孤独や悲しみに甘えるには、彼の人生はあまりに過酷なものに過ぎた。

L'enfant se sent, selon la lanteur des caresses,

20 Sourdre et mourir sans cesse un désir de pleurer.[66]

(*Les chercheuses de poux*)

(「子供は、ゆるやかな愛撫のままに感じている。

泣きたい思いが絶えず湧き上がりまた消えるのを。」)

それ故、RIMBAUD がその辛い過酷な人生において、常識的には生と死は根源的に一致しないことを認めるとして、死ではないそれなりの一つの休息を見出そうとするのはよく理解できることなのである。あの最初期の *Le soleil est encore chaud...* で始まる短文の後半で、後に «Une saison en enfer» の中で、

J'ai horreur de tout les métiers. Maîtres et ouvriers, tous paysans, ignobles. La main à plume vaut la main à charrue.—Quel siècle à mains!—Je n'aurai jamais ma main. (*Mauvais sang*) [94]

（「どんな仕事だろうと、仕事などは願ひ下げだ。親方たちと職人たち、みんな百姓だ、卑しいものさ。ペンを持つ手は、<sup>すき</sup>犁を持つ手と同等だ。——なんという手だらけの世紀だろう！——ほくは自分の手など決して持つまい。」）

Jamais je ne travaillerais... (*Délires I*) [103]

（「ほくは決して働いたりしないだろう……」）

と働くことへの嫌悪を確言することになる RIMBAUD は次のようなことを述べている。

ほくは心の中で言ったものだ——いったいなぜ、ギリシャ語やラテン語を勉強しなければならないんだ、と。ほくにはそれが分からない。結局そんなものそんなものは必要じゃない！このほくが試験に受かろうが受かるまいが、どっちだっていいのさ…… 試験に受かったってそれがなんになる。何にもなりやしない。そうじゃないか？それでもみんな試験に受かってはじめて地位がえられるという。ところが、ほくは地位なんて欲しくない、ほくは年金生活者になるんだ。たとえ地位が欲しいとしたところで、なぜラテン語を勉強するのか、あんな言葉を話すものは誰もいやしない。（中略）ああ！畜生こん畜生！やれやれこのほくは年金生活者になるんだよ、学校の椅子でズボンをすり切らせるなんて、まったくぞっとしない……勝手にしやがれさ！

[173]

繰り返し発せられる「畜生」という呪文について、粟津則夫は「嫌悪というひとつの意味を表明するにとどまらず、その発声を通して、嫌悪の対象を遠ざけ払い去る、悪魔祓的の性格を帯びるに至る」<sup>9)</sup>と指摘しているが、「年金生活者

(rentier)」、わずか10歳やそこいらの少年が素朴な思い付きで言い出したとしても、この言葉はあまりにRIMBAUDの求め続けたものを暗示し過ぎている。というのは、RIMBAUDが生涯も読めたものは、必ずしも現実生活において「年金生活者」のような小市民的な安寧に浸ることではなく、〈rentier〉という言葉の象徴する一種絶対的な休息なのである。この少年RIMBAUDは、文学と決別した後、遠く灼熱の砂漠を彷徨いながら、盗まれることを恐れて腰に巻付けた数キロの金の重さに身を獲られ、

もしここで仕事が再び始めれば、私はたぶん2・3年のつもりで1886年から87年まで契約することになるでしょう。その頃には私は32か33歳になっています。そろそろ老け始めるころです。そうしたら、ここで貯えることができるはずの三万フランばかりを集めて国で結婚する時期でしょう。国では私はただ老人のように見つめられるでしょうし、私と結婚を承知してくれるのも未亡人ぐらいしか残っていないでしょう！<sup>10)</sup> (1884年5月29日)[387]

とアデンから母親に書き送る30歳のRIMBAUDと奇妙に繋がっていくものである。

RIMBAUDの一生を貫くある種気忙しい生活ぶりと行動には、〈Attendrons dans le calme et le recueillement. 「平穏に、瞑想のうちに待つことにしよう。〉(Un cœur sous soutane)[200]といった余裕はなく、試作品を書くことに己の実存の全体性の回復を信じ極限的な実践を試みた時期、つまり試作と放蕩に身をやつ棄した見者の理論の時期においても、そこに求められたものは、やはり昂揚した精神と実存の合一が最も昇華された形で果たされるような点で獲得されるはずの一つの絶対的な安寧・休息なのである。そこにおいてだけ、*Le cœur de pitre*の〈Mon triste cœur bave à la poupe./Mon cœur couvert de caporail : /Ils lancent des jets de soupe.[46]「ぼくの悲しい心臓は船尾で涎をたらす。

／ほくの心臓は安煙草で一杯だ！／奴らはそこにスープのへどをぶっかける』という詩句に表されたような RIMBAUD の最も暗い部分、自己嫌悪から逃れることができるのである。

こうした RIMBAUD の一つの安息への強い志向は、例えばあの VERLAINE とのブルッセル事件の後、イギリス、ドイツ、スイス、イタリア更にはバタビア、アフリカへと憑かれたように歩き回った放浪の果てに、絶えず一種帰巢本能のように舞い戻った生地シャルルヴィルと母親のもとに、その具体性を認めることもできるだろう。RIMBAUD は絶えず何処かへ帰り着くことを考えていたし、そしてそこでの僅かな休息の後また何処かへ出発せずにはいられないのである。このことは恐らく詩人 RIMBAUD の多くを説明しているだろうと思われる。

しかし、RIMBAUD はそうした安息の夢の不可能性に気付かなければならない運命にある。

—il y a des auberges qui pour toujours n'ouvrent déjà plus—il y a des princesses, et, si tu n'es pas trop accablé, l'étude des astres—le ciel.  
(*Métropolitain*) [144]

(「もう永久に開くことのない宿屋もある——王女たちがいる、それに、お前があまりに疲労困憊していなければの話だが、星の研究もある——空だ。』)

RIMBAUD は、現実から疎外された心を非現実の「もう一つの世界」に癒されることを願って、この世界から脱出することを企てる。「Une saison en enfer」の *Délires I* の中で「狂気の処女 (Vierge folle)」は次のように語る。

A côté de son cher corps endormi, que d'heures des nuits j'ai veillé,

cherchant pourquoi il voulait tant s'évader de la réalité[104].

(「眠っているあの人のいとしい身体のそばで、いったい幾晩、私は夜を徹して思案していたことでしょうか、なぜこの人はこれほどに現実から脱出しようとするのか、と。』)

更に同じく *Délires I* の次の詩句：

Mais, après une pénétrante caresse, il disait : «Comme ça te paraître drôle, quand Je n'y serai plus, ce par quoi tu as passé. Quand tu n'auras plus mes bras sous ton cou, ni mon cœur pour t'y reposer, ni cette bouche sur tes yeux. Parce qu'il faudra que je m'en aille, très loin, un jour.[104]

(「でも、身に沁みるような愛撫のあとで、彼はこういうのです。「ほくがいなくなったら、こうやっておまえが経験してきたことは、どれほどおまえに奇妙に思えることだろうか。おまえの首筋にまわしたほくの腕も、おまえが安らぎを得るためにある僕の胸も、おまえの眼に触れるほくの口も、もうなくなってしまおうとしたら。なぜって、ほくはいつの日か、ずっと遠いところへ行かなくてはならないのさ。』)

キリスト教を始め、RIMBAUD を窒息させてしまう様々な拘束のあるこの世界とは、現実的には彼の生まれ育ったヨーロッパ (文明) に他ならない。

Je vois que mes malaises viennent de ne m'être pas figuré assez tôt que nous sommes à l'Occident. Les marais occidentaux! (*L'impossible*) [112-113]

(「ほくは自分の不快感が、ほくたちは西欧にいるということにもっと早く思い至らなかったせいだとわかるのだ。西欧の沼。』)

RIMBAUDには、自己の精神が歴史的にもヨーロッパとは異質のものであることは分かっていることなのである。

Si j'avais des antécédents à un point quelconque de l'histoire de France!  
Mais non, rien. (*Mauvais sang*) [94]

(「フランスの歴史の、どこでもよい、どこかの地点に、ほくのような存在の前例が見つかったらいいが！いやだめだ、なにもありはしない。」)

ならば、このヨーロッパを見限って未知なる国に生きることが残された道である。

Me voici sur la plage armoricaine. Que les villes s'allument dans le soir.  
Ma journée est faites; je quitte l'Europe. L'air marin brûlera mes poumons;  
les climats perdues me tanneront. Nager, boyer, l'herbe, chasser, fumer  
surtout; boire des liqueurs fortes comme du métal bouillant,—comme  
faisaient ces chers ancêtres autour des feux. [95—96] (*Ibid.*)

(「いまほくはアルモニックの浜辺にいる。夕暮れには街々の灯が点るとよい。ほくの日程は終わった。ヨーロッパを離れるのだ。海の風がほくの肺腑を焼くだろう、辺境の気候がほくの肌をなめして浅黒くするだろう。泳ぎ、草を踏みしだき、狩<sup>かり</sup>猟をし、とりわけ煙草をふかすのだ。煮えたぎる金属さながら強い酒を飲むのだ——ちょうどわが祖先たちが燃える焚火を囲んでしたように。」)

Connais-je encore la nature? Me connais-je?—Plus de mots. J'ensevelis  
les morts dans mon ventre. Cris, tambour, danse danse danse! Je ne vois  
même pas l'heure où, les blanc débarquant, je tombrai au néant.



Faim, soif, cris, danse, danse, danse, danse! [97-98] (*Ibid.*)

(「ぼくはまだ自然を知っているだろうか? 自分を知っているだろうか? ——もう言葉なんかない。ぼくは死者たちを腹のなかに埋葬する。叫び、太鼓、ダンス、ダンス、ダンス、ダンス! ぼくは思ってもみない、やがて白人たちが上陸してきて、自分が虚無に落ちこむ時が来ようとは。飢え、渇き、叫び、ダンス、ダンス、ダンス、ダンス!」)

この一節について、『ランボー全詩集』の註は次のように的確に説明している。

「ぼくはまだ自然を知っているだろうか?」と問いかけたとき、おそらく語り手の〈ぼく〉は、「ぼくはもう言葉なんかない」と直感したのだろう。つまり、「自分」が本来的には「獣」であり、「黒人」であることを「知る」ためには、理性的・知的・一言葉的(すなわちロゴスの)なものから抜け出すほかないということ、言いかえれば、通常の仕方で言葉をあやつること——たとえば、「私は考える」Je pense という言い方をなんの疑いもなくそのまま踏襲すること——が、まったくそうとは気づかぬまゝいつのまにか自分のうちに形成している論理や理知や良き判断力から抜け出して、どうしても(規範化された言葉の用い方によっては)「言い表せないもの」(「言葉の錬金術」)——たとえば、「ひとが私を考える」On me pense というような、フランス語の文法構造をあえて言い方でしか示唆できぬ、未知なるもの——へと入り込んでいく以外に道はない、と直感したのだろう。こうしてぼくは、言葉を用いることに頼らぬ人間、ランゲージを成り立たせている仕組みとその作用に基づいて構築されている<sup>ディスクール</sup>〈言説〉的思考・論理に重きをおかず、むしろ場合によっては呪術的な思考のほうを信頼し、死者の威力を自らの体内に取り込むために「死者を腹のなかへ埋葬する」<sup>カニバル</sup>食人種のような人間、叫び声をあげ、太鼓を打ち、ダンスをする人間に同一可る<sup>11)</sup>。(湯浅博雄)

ヨーロッパ世界へ戻ることも、キリスト教によって救済されることもできない RIMBAUD は、歴史からはみ出した劣等民族の中で生きそこに自己の存在の救いを見出すしかないことを自覚する。

Je reviendrai, avec des membres de fer, la peau sombre, l'œil furieux;  
sur mon masque, on me jurera d'une race forte. J'aurai de l'or : je srai oisif  
et brutal. Les femmes soignent ces féroces infirmes retour des pays chaud.  
Je serai mêlé aux affaires politiques. Sauvé. (*Mauvais sang*) [96]

(「ぼくは戻ってくるだろう、鉄の四肢、褐色の肌、荒々しい眸をして。そんなぼくの顔貌を見て、みんなぼくが屈強な種族の人間だと思うに違いない。ぼくは黄金を手にするだろう、のらくら者で、かつ乱暴な男になるだろう。女たちは、熱い国から帰還したこれらの獰猛な不具者の世話をす。ぼくは政治的な問題に巻き込まれるだろう。救われるのだ。)」

しかし、こうした不可能事を彼には既に閉ざされてしまっているこの世界で果たそうとすること自体一つの矛盾であり、そこから RIMBAUD は自己に課した試練、運命を変えようとする態度に対する現実からの仕返しを被り、絶えず徒労感を吐露する。それ故、彼を現実から超越させてくれるものへの憧れを吐き続けることになる。*Comédie de la soif* の 4 *Le pauvre songe* の次の詩句はそれをよく示している。

Peut-être un Soir m'attend  
Où je boirai tranquille  
En quelque vieille ville,  
Et mourrai plus content :  
57 Puisque je suis content!

Si mon mal se résigne,  
Si j'ai jamais quelque or,  
Choisirai-je le Nord  
Ou le pays des vignes?...

62 —Ah! songer est indigne[75]

(「きつといつか夜がぼくを待っていて  
そのときぼくは静かに飲む  
どこかの古い町でのことだ。  
それからもっと満ち足りて死んでゆく、  
だってぼくはがまんの子だからな！

僕の不運とも手が切れて、  
もしいくばくかの金があれば、  
北国にしとうかな  
それとも葡萄の実る国か？  
——ああ！夢見てもはじまらない。）」

RIMBAUD の超人的なスピードでもって展開された生の荒々しさは、こうした  
休息への偏執的ともいえる渴望と裏腹の関係にあったのである。

## V

この *Le pauvre songe* に RIMBAUD 特有の、自己の運命に対する予言者的な  
能力を認めることができるが、そうした RIMBAUD の諸傾向は、彼の書いた  
最も長い韻文詩 *Le Bateau ivre* の中で先取されて総合的に描き出されること  
になる。この詩編は RIMBAUD が初めて VERLAINE を訪れた時に携えて行っ

たもので、まもなく方法論的覚醒を得る RIMBAUD の「見者の詩法」による、*Voyelles* と並んで、最初の傑作群を構成しており、彼はこの *Le Bateau ivre* を書くことによって、未知のもの、新たな空間の開拓を行おうとしたのである。Albert THIBAUDET はこの詩を讀んで次のように言った。

この詩編こそ自らの体内、血肉のうちに、狂おしい行動への欲望、ランボーをフランスの旅路のみならず、世界のあらゆる旅路の果てまで引き廻した歩行と逃走への欲望を秘めている人間の、天才的な靈感そのものである<sup>12)</sup>。

詩の中における主体は、「酔い痴れた船」に自己を託して語っている RIMBAUD ではなく、船そのものであって、孤独な幻想的世界を「酔いしれた船」そのものが、反抗と挫折を繰り返しながら、海の中を流れ、駆け巡って行く様が描き出される。

Comme je descendais des Fleuves impassibles,  
Je ne sentis plus guidé par les haleurs;  
Des Peaux-rouges criards les avaient pris pour cibles  
4 Les ayant cloués nus aux poteaux de couleurs.[66]

(「洋々として動じない大河を下っていた時

ぼくはもう船引きたちの導きを感じなかった。

叫び立てる赤肌人が奴らを的に殺到し、

色とりどりの柱に裸で釘づけにしてしまったから。)]

と第一連で乗組員がインディアンの的にされて殺され、舵取りを無くしたことが示され、フランドルの小麦や英国の綿花を運ぶ任務からも解放された「酔い痴れた船は」

<sup>8</sup> Les Fleuves m'ont laissé dscendre où je voulais.[66]

(「大河はぼくを思いのままに下らせてくれた。」)

と解放の歓びをうたいながら、ものとの出会いと偶然性に身を委ねて、絶対の自由を謳歌する。

Dans les clapotements furieux des mares

Moi l'autre hiver plus sourd que les cerbeaux d'enfants

Je cours! Et les Péninsules démarrées

<sup>12</sup> N'ont pas subi tohu-tohus plus triomphants

Le tempête a béni mes éveils maritimes

Plus léger qu'un bouchon j'ai dansé sur flots

Qu'on appelle rouleurs éternels de victimes,

<sup>16</sup> Dix nuits, sans regretter l'œil niais des flots!

Plus douce qu'aux enfants le chair des pommes sures

L'eau verte pénétré ma coque de sapin

Et des taches de vins bleus et des vomissures

<sup>20</sup> Me lava, dispersant gouvernail et grappin

Et dès lors, je me suis baigné dans le Poème

De la Mer, infusé d'astres, et lactement,

Dévorant les azurs verts; où, flottaison blême

<sup>24</sup> Et ravie, un noyé pensif parfois descend;

Où, teignant tout à coup les bleuités, délirés  
Et rythmes lents sous les rutilements du jour,  
Plus fortes que l'alcool, plus vastes que nos lyres  
28 Fermentent les rousseurs amères de l'amour! [66-67]

(「海流の狂おしい潮騒のなかを、

ぼくは、過ぐる冬、子供たちの頭よりも聞く耳をもたず、  
疾駆した！陸地から解き放たれた半島も  
これほど誇りに満ちた混沌を身に受けたためしはなかった。

<sup>あらし</sup>暴風雨がぼくの海上の眼ざめを祝ってくれた。  
コルクの栓よりも軽々とぼくは踊った、  
永久に犠牲を転がして止まぬという波の上で  
十夜、波止場の灯の呆けた目配せには未練も残さず！

酸っぱいリンゴも子供らには甘い、もっと甘美な、  
緑の海水がぼくの<sup>もみ</sup>樅材の船体にしみ入って  
安ワインの汚点や嘔吐のあとを洗いさり、  
やがて舵も錨も散り散りに流してしまった。

こうしてその時から、ぼくは身を浸したのだ、  
星々の光を浴び、乳色に染まりゆき、  
空の青をむさぼる〈海の詩〉に。そこには色青ざめてうっとり  
と浮かぶ  
思い深げな溺死人が時おり流れてゆく。

またそこには、真赤に輝く太陽の下、狂奔する波、  
穏やかなリズムの波の青海原を急に染め、  
アルコールより強く、わが豎琴の音色よりも広漠とした  
愛の苦い朱色が<sup>かも</sup>醸しだされる！」)

そして「酔い痴れた船」は世界の海を自由自在に縦横無尽に駆け巡りながら、  
未知のものの発見と認識を果たしてゆく。

Je sais les cieux crevant en éclairs, et les tombes  
Et les ressacs et les coulants : je sais le soir,  
L'aube exalté ainsi qu'un peuple de colombes,  
32 Et j'ai vu quelque fois ce que l'honne a cru voir!

J'ai vu le soleil bas, taché d'honneurs mystiques,  
Illuminant de longs figememts violets,  
Pareils à des acteurs de drames très antiques  
36 Les flots roulant au loin leurs frissons de volts!

J'ai rêvé la nuit verte aux neiges éblouies,  
Baiser montant aux yeux des mers avec lenteurs,  
La circulation des sèves inouïes,  
40 Et l'éveil jaune et bleu des phosphores chanteurs!

J'ai suivi, des mois pleins, pareille aux vacheries  
Hystériques, la houle à l'assaut des récifs,  
Sans songer que les pieds lumineux des Maries

44 Pussent forcer le mufle aux Océans poussifs!

J'ai heurté, savez-vous, d'incroyables Florides

Mêlant aux fleurs des yeux de panthères à brides

48 Sous l'horizon des mers, à de glauques troupeaux!

J'ai vu fermenter les malais énormes, nasses

Où pourrit dans les joncs tout un Léviathan!

Des écroulements d'eaux au milieu des bonaces,

52 Et les lointains vers les gouffres cataractant! [67]

(「ぼくは知る、稲妻になって碎ける空を、竜巻を、  
また逆巻く波や潮流を。ぼくは知る、夕暮を、  
鳩の群れのように喜び舞い上がる〈暁〉を、そして  
ぼくは、時に人が見たと信じたものを、この目で見ただ!」

ぼくは見た、神秘的な恐怖に染まった沈む夕陽が、  
古代の劇の俳優たちかと見まがう  
紫の長い凝結をあざやかに輝かせるのを、  
波が鎧戸のようなその身震いをはるか沖合に転がすさまを。

ぼくは夢見た、ゆっくりと昇って来て、海の眼に  
<sup>くちづ</sup>接吻ける、<sup>まぼゆ</sup>眩い雪の降る緑の夜を、  
未聞の世紀の循環するさまを、  
歌うたう燐光が黄や青に目覚めるさまを!



ぼくは、幾夜となく追いかけた、ヒステリーの牛の群れさながら  
暗礁に襲いかかる大波のあとを、  
マリアたちの輝く御足が、荒い息を吐く  
〈大地〉の鼻面を取り、静めようとは思ひもよらず！

ぼくは行き当たった、あの世にも不思議なフロリダ州、  
人肌をした豹の眼が花々に混じり合うところ！  
何本もの虹が、水平線の果ての海緑の家畜を率いるかのごとく、  
まるで手綱のようにかかっていた！

ぼくは見た、臭く泡立つ巨大な沼、その魚や筈なに  
一頭の巨怪獣レヴィアタンが藪草いぐさのなかで腐っていた！  
大風のさ中でも海水は崩壊し、  
遠景は滝のようにとどろく深淵に向う！)

(下線筆者)

こうして絶え間ない発見の流浪の旅を続けた「酔い痴れたた船」に、突然故郷の、ヨーロッパの郷愁が突如襲ってくる。

Fileur éternel des immobilités blues,

84 Je regrette l'Europe aux anciens parapets! [67]

(「不動の青海原を永遠に航行する者。

ぼくは昔ながらの胸壁をめぐらしたヨーロッパが懐かしい！)」

当てどころのない流浪の旅は、未知のものの発見の歓びから、永遠に救われることのない流罪なのではないかという不安へと変ずるが、詩人はそこから彼を

解き放ってくれる超越的なものへの憧れの中に救いを求める。

—Est-ce en ces nuits sans fonds que tu dors et t'exiles,

<sup>88</sup> Million d'oiseaux d'or, ô future Vigueur?[69]

(「——おまえが眠り、身を潜めるのは、底知れぬこの夜よりのうちか  
百万の黄金の鳥たち、おお 未来の生气よ！)」

しかし、最後の三連で突然の転調をして、

Mais, vrai, j'ai trop pleuré! Les aubes sont navrante.

Toute lune est atroce et tout soleil amer;

L'âcre amour m'a gonflé de torpeurs enivrantes.

<sup>92</sup> Ô que ma quille éclate! Ô que j'aille à la mer!

Si je désire une eau d'Europe, c'est la flache

Noire et froide où vers le crépuscule embaumé

Un enfant accroupi plein de tristesse, lâche

<sup>96</sup> Un bateau frêle comme un papillon de mai.

Je ne puis plus, baigné de vos langueurs, ô lames,

Enlever leur sillage aux porteurs de cotone,

Ni traverser l'orgueil des drapeaux et des flammes,

<sup>100</sup> Ni nager sous les yeux horribles des poumons.[69]

(「だが、本当に、ぼくはあまりに涙した！〈曙〉は胸をえぐる。

月はすべてむごく、太陽はすべて苦い。

しびれるほどの愛にぼくは麻痺してしまった。

おお、竜骨よ砕けろ！ぼくは海に沈もう！

ぼくがヨーロッパの水を<sup>のぞ</sup>希むとすれば、それはあの暗く、  
冷たい森の池、そこに芳しい夕まぐれ  
うずくまった少年ひとり、悲しみに満ちた心で、  
五月の蝶のようにかほそい舟を浮かべている。

おお波よ、おまえの<sup>けだ</sup>倦怠るさに浸っては、ぼくはもう、  
綿を運ぶ船の<sup>みお</sup>水脈を追うことも、  
翻る旗や炎の傲りを横切って進むことも  
囚人船の怖ろしい眼の下を泳ぐこともままならぬ。』)

と「酔い痴れた船」は、故郷への、幼い頃への思い出に襲われながらも、孤独と挫折の中で、もうあのヨーロッパへは帰ってはいけないことを、あの現実世界へ戻ってはいけない自分という存在であることを、疲れ切った静寂の中へと目を向けながら悟らなければならない

まさにこの *Le Bateau ivre* は、RIMBAUD 自身の生涯を予言的に語って余りあるものがあるけれども、この詩の示すものは、解放の喜びと流浪の悲しみであることと同時に、「全体的な酩酊と真の自由の難しさ」<sup>13)</sup> (J.-P. RICHARD) を如実に具体化しているのである。RIMBAUD の企てようとしたこと、それは「BAUDELAIRE 的な郷愁を征服運動に変え、過去を未来に変え、出来るならば現在を燃やし尽くし、そして存在の全ての次元において未来の精気 (future vigueur) を目覚めさせること」<sup>14)</sup> (*Ibid*) なのであった。

## 註

使用テキスト：RIMBAUD, *Œuvres complètes*, par Antoine ADAM, «Bibliothèque de la pléiade», Gallimard, 1972。RIMBAUD の作品の引用の [ ] の数字はこの版の頁。以下 O.C. と略記。

- 1) 〈Il a peut-être des secrets pour *changer la vie*? Non, il ne fait qu'en chercher, 〉(「もしかしたらこの人は生を変え<sup>え</sup>るための秘密を手<sup>て</sup>にしているのでしょうか? いやいや、彼はそれを探しているだけなんだ」), *Délires I. Vierge folle*, O.C., p.104
- 2) Jacques RIVIÈRE, *Rimbaud*, éd.Emile-Paul Frères, p.44
- 3) J.-P. RICHARD, *Poésie et profondeur*, Seuil, p.240
- 4) 小林秀雄「ランボー I」、現代日本文学大系 60 「小林秀雄集」、筑摩書房、p.88
- 5) Yves BONNEFOY, *RIMBAUD par lui-même*, Seuil, p.5
- 6) *Œuvres RIMBAUD*, par S. BERNARD, Garnier, p.523
- 7) Yves BONNEFOY, *Op.cit.*, p.11 – 12
- 8) BAUDELAIRE, *Œuvres complètes*, 2vols, par Claude PICHOS, Gallimard, t. II, p.578
- 9) 粟津則夫「ランボー全作品集」、思潮社、p.555
- 10) O. C., p.387
- 11) 「ランボー全詩集」、青土社、p.611 – 612
- 12) cité in 「ランボー全詩集」、p.536
- 13) J.-P. RICHARD, *Op.cit.*, p.191
- 14) *Ibid*, p.194